



《施設の概要》

◆ 施設の位置・由来

ひたちなか市武田は、天下の名将武田信玄(晴信)で有名な甲斐武田氏の発祥の地です。武田信玄が活躍したのは戦国時代の16世紀後半で、信玄からさかのぼる17代前の源義清は、平安時代末期(12世紀初め頃)に当時の常陸国那賀郡武田郷(現在の本市武田)を領して、武田義清と名乗って、後の甲斐武田氏の始祖となりました。

◆ 源義光の常陸進出

甲斐源氏の先祖である源義光は、源頼義の三男で、近江国の園城寺(三井寺、滋賀県大津市)の守護神である新羅明神で元服したため、「新羅三郎」と称しました。なお、兄の義家は石清水八幡宮(京都市八幡市)で元服したので「八幡太郎」と名乗った。義光は東北地方で起こった豪族同士の争いである後三年の役(1083~1089年)に、陸奥守となった義家の苦戦を聞き、兄の義家を助けるため、官職を棄てて参戦し武名を高めました。義光は、その戦功により常陸介(常陸国の国司)などに任ぜられました。義光は常陸国に進出するにあたり、在地勢力と連携することによって常陸進出の野望を実現していったのです。

◆ 武田冠者義清

義光には、義業・実光・義清・盛義・親義らの子がいました。まず長子の義業に常陸大掾氏の吉田清幹の女をめとらせて縁戚関係を結び、久慈郡佐竹郷(常陸太田市)に配置し、義業の長子昌義は、「佐竹冠者」と呼ばれて佐竹氏の祖となりました。また、三男の義清を那賀郡(吉田郡)武田郷に配置して勢力の拡大を図ろうとし、義清は刑部三郎と称し、武田郷の地名にちなみ初めて武田氏と称し、「武田冠者」と名乗り、武田氏が誕生することになりました。

◆ 甲斐国へ配流

義清とその長子清光は、武田郷周辺の古くからの在地豪族との間で勢力を張り合っていました。そのため、大治5年(1130年)に常陸の国司から「清光

らんこう

濫行」として朝廷に告発されてしまいました。特に義光が大治2年(1127年)に世を去ってからは、義清・清光に対する風当たりが一層強まったものと考えられます。

その結果、義清・清光父子は常陸国を離れ、甲斐国市河荘(山梨県昭和町、中央市、市川三郷町付近)に配流されました。甲斐国は清和源氏にとって、義光の祖父頼信が甲斐守になったゆかりの地であり、義清・清光の子孫は、甲府盆地周辺に土着し、着々と勢力拡張の基盤を固め、またたく間に広がりしました。

◆ 武田氏館跡

義清・清光父子が居を構えた館は、那珂川沖積地を見下ろす武田台地の南端部あったと考えられています。武田台地から南東方向に舌状にのびた要害の地で、東と西に深い谷があり、地形を利用した平山城形式です。館跡は、ひらやまじろ 湫尾神社境内に続く標高20mほどの丘陵で、その形がすり鉢を伏せたように見えることから通称「スリバチ山」と呼ばれていました。明治時代に常磐線の開通によって分断され、戦後の土取り等の開発によりスリバチ山は崩されてしまい、現在は平坦になってしまいました。

◆ 再現された武田氏館

甲斐武田氏発祥の地を顕彰するため、湫尾神社北側に「武田氏館」を建設いたしました。この館は、昔の絵巻物(一遍上人絵伝等)などをもとにして当時をイメージして再現した木造平屋建の建物で、おもや なや うまや 主屋・納屋・厩を配置し、館の正面には門・板塀・堀があります。主屋の造りは、主屋と玄関をつなぐ中門の張り出しが特徴のしゅでん 主殿造りと呼ばれる建築様式です。

主屋の内部は展示室として整備し、甲斐武田氏発祥の地に関する資料、甲冑などの武器・武具類、武田地区の歴史資料などを展示しています。

《利用案内》

- ・所在地：〒312-0025 茨城県ひたちなか市武田 566-2
- ・TEL：029-276-2525
- ・開館時間：午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
- ・休館日：月曜日(祝日の時は翌日)、年末年始
- ・入館料：無料
- ・交通案内：① JR 常磐線勝田駅より茨城交通バスで武田本町下車、徒歩約10分
② 東水戸道路ひたちなか IC から車で約15分